

911.3

八

全

俳諧古撰集

選帝

下卷

選雜

下

下

下

下

之仙樂

取焉

若此

遂定

不別

歌詩

之

言

選也

四

近世

俳家

名流

戶

所選

本雜

名

是選

其象

不存

世而

求

法

古

國

世而

求

法

古

國

世而

求

法

古

國

世而

求

法

古

國

投石雖之豈皇編卷里之邪之風調
之有邪耶。刑正之義荒矣。歌詩之
是。研揚之厚。為頗難。于四書。以此
初未選也。予宜矣。方其初。于四書。以此
之。高第也。予有哉。于四書。以此。不揣。
隨安。覽古人之道。以佳什。輒鈔焉。
公諸名家。就其本集。搜之。如事而

殆子篇少諸家之選無我特智難因
 挂一歸十善有之尤且此家集多未
 持以惜寸寸龍身大故選閑盡
 殊方能讀管之明去補金之朕選
 命其完彩夜半異代之張雷矣
 序選難矣七條第千五之臨
 其多如多之選之得失也六惟在

後人之擇也るを矣
資壽十歲庚辰春三月

平安 三宅嘯山



依譜古撰序

同知此を依譜ハ^き譜冊二極の
神性ニ言ふ^を起^る典^々著^系
の仲律玉の^{ちる}務^むゆやん
なりと^るさあ^るハ大内山乃
花^み酔^てふ人^のり^ふれ^さる

なり 長流の月 舟の
し おもひ 舟の 舟の
し 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の

とがりう今や子う撰の序を
予ふねる^きし^きの切るれいふ
この海はいふうこいよしわ
の表のそつし^き言の美をい
ちらぬ何れぬみすいふ
石の枝おきりあねを幸ふ

いもんもいせきのうと
き

宝馬十策の茶獵の自東山
練石亭^きき^き

重光道人釈迦致雄



多のりつに遊せんの日新
るのりの池のさる所の

あな

上座を信也のりし

麦りかけ

夕陽やとまの年の

蟬の聲

惣論

俳諧盛行百有餘載矣其間太槩可裁
作三而觀也守武宗鑑逮貞德李吟等
為一其體率先戲謔而似不有自然之
妙蓋當時欲競異干聯歌勢之所至弗
得不爾也諸集有力選者而今閱之則
若披沙拾金諸師雖才學優時運未至
工夫不透徹耳既上自延憲下至正德

洛有信德言水開以東則有芭蕉嵐雪
其角津南有來山鬼貫各虎眈一方一
時作者雁行者不下十數家風化大開
體制初備其妙悟處不可捉摸如水中
之鹽味色裡之膠青言雖有盡而意興
無窮也雖有來者而無繼其盛矣是一
衰降而自享保至今三四十載間作者
年多風格日乖門戶競開多岐失羊所
謂盛極衰兆亦是下衰

今代之聯句洛一趨精工浪華勤事痛
快雖他邦窮力竭精者皆不能逮與他
是專句戰也至不拘連續唯主獨造是
其通病

洛津之發句動綺刻不優獨江都不然
聯句樽節今古不工不粗發句專法中
古調如散漫意乃不迫尚有盛時之遺

響。

他邦之蕉門常口正風其發句釘鉅響影可觀者鮮然而刻鵠不成猶類響者也至聯句則徒守株耳斷不能出繩墨之外如三都句戟之調決不克作何其偏枯也。

近時蕉門所輯多限其一派而不波及他亦挾小哉愛而知其惡憎而知其善

風雅之道安立彼此乎哉

世有換句者讀之則玉石碌落精麁者幾罕換之義真難言哉

嚴羽卿曰詩有別材非關書也詩有別趣非關理也然非多讀書多窮理則不能極其至豈惟詩哉和歌聯俳皆然世人知字多者好用典故大露筋骨或拘々窘於事實面目殊可憎增覺嚴氏之

言不誣。

世所梓紀行論談等。忽率尚可恕。至無名無據杜撰咕哩。是弋利耳。宜矣哉。其不振也。

俳歌名盛實衰者。無他。抗顏稱宗工者。率為活計已。業既然則所見之句。雖心不允。而面諛稱善焉。自作亦勤。欲合人意。烏乎其入。鮑肆之徒。安得不蒙臭耶。

濃之一派。平時論曰。聯句有必承得不動。間不容髮之味也。晚近多眩此說焉。若其如此。則非活事矣。語脉意脉相接之間。自有百出不窮之妙。而後可稱本來面目也。如謂某下決不出某句。則甲同乙丙同丁。許六丈草之什。齊之其角。其角之調。齊之芭蕉乎。噫。管豹蠡海。以為得蕉老之衣鉢者。吾不信。

聯句者活物不可擬論之也。今洛津之作者與他邦蕉門互相齟齬焉。余謂俱非矣。何也。聯句也者所與衆共如執一則拘拘則不優安得縱橫今古邪。正格寔風要在具體耳。唯發句不爾。近中原之風調多入野狐禪。他邦雖率粗鹵尚不失為小乘。此事未易為耳。食之輩道也。

世又有惡俗習士而其舉動不能卓爾者。憚與衆異耳。是猶惡濕而居下也。亦復不取也。

論俳二字之可否。或鑿索鳥獸之異稱。或好用非常之助辭。要皆閑事。高士不為。

風俗文選。本朝文鑑俱滑稽於國字者。而其中冗長極多。余思俳體之文無止。

子其序記銘贊邪其餘諸體強解事類
不作可也

支考註自作文殆平地起波何其急于
名利也其國字詩長歌等作尤足覆瓿
為出於芭老之意者欲蓋彌彰豈得掩
天下之目邪

余素囁嚅豈好辨乎而既有所論選則
箭正上絃勢不得不發顧知我罪我者

其惟此選乎大道小伎將無異

選或失則寬或失則刻今之選亦是從
隗始之意耳安知他日千里之馬不至
耶

物論畢

邊地自無花

凡例

曰詩曰歌唯古之尚獨俳不然也百年
前合作者實僅々晨星歌詩所謂古也
者南雅萬葉其體制之玄意味之妙後
世雖殫意擬之不能入其闡域也俳也
者若欲擬寬正之調則咄嗟可成矣今
之擬古也者一取元審之諸子

古來選集先題目而後標句今選全不

狗題唯分四季耳。標出一人則其數篇皆連錄焉。要欲見家々風調之高下也。所擬句中若字有未穩者則為改竄而錄焉。亦是古人之遺意。而百中之一耳。往古集回文秦曲等諸體尤多矣。淘之汰之無一佳者。今不復收。
選中評註亦用國字。後慮其蔓延更作華言。

俳諧古選卷之一

平安三宅嘯山編

春之部

えおのれ代のりとも思ふ

守武

俳歌久矣。雖然專門成家以公為始。今讀其遺篇。不易之什。不為不深可尚焉。

えおのれ代のりとも思ふ

宗鑑

艸山答人書曰。予不知宗鑑同於足下。蓋艸山去鑑不遠。而其事蹟

湮沒如レ此ノ顧其真隱歟
又て世はくくハ其のくく
こつてや中よる帷く那
此等皆可誦ス

門くの松をあや君く代の素
貞徳

むらとてくくま娘の清く時

みまのくくくくく

神くくくくくくくくく

翁出レ武ヲ入レ文ニ以レ能道ヲ自ラ倭始定ヲ觀
則レ後世依レ頼之ニ難ニ二出入者要
不能逾其範圍且以昌三ヲ為子羅
山州山為明人於盛哉

ハまの隠ふ似世を花乃る
立圃

此人多藝至令稱之惟其一派寥
々可レ觀

彼者くくくくくくくくく
重頼

才學風格可レ与立圃伯仲ス

是くくくくくくくくく
貞室

此叟有古風中也稍開天真之端
貞元諸子實有依焉可以系正
也而此篇不特集中第一又古今
絶唱勢山題咏多々皆不能入此
妙境也

わく花の足ハんかゝのふきき

望一

たのつゝゝ雪をさや雪をの竹

不圖此時而有此妙也

あまや舞もうゝふ怒れる

京梅盛

わゝまゝ育らゝゝをさうゝと

同松堅

温雅

あまやとゆゝゝをさゝこの物

同安静

あまふゝゝやまは代とそゝゝとま

季吟

地まゝゝ木の間の花の郊うわ

一僕とがゝゝゝゝゝゝ花のふ

博聞強記現丁後世無比非體未
脛古轍而其巾還有一種風致

名の有ぬふかゝゝゝゝゝゝゝ

湖春

あねまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

城壁ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

此人能格勝于乃翁而山櫻之
太佳

世の中や城ゝゝゝゝゝゝゝゝ

大坂宗因

連環可誦○以翁与重頼交見思
貫筆記也唱談林一派亦是對機
耳今解所録数篇可觀其意何如
也

寂寂の松清もやうのうら
同 西鶴

此ノ老以國字多鳴世而發句似不
甚長

恰や三日の月吐くうの海 同 由平

此人為來山之師但其作不多見

まのむすねは八聖の花刀今
下野 立外

月と関て雲の花刀今
和泉 芳重

雪や花の跡とく種乃ち
尾張 光弘

中より露の姑嫁うもくさ
道職

花さけと歩める面や親の枝
大坂 休安

風のふれ布うね花の枝も
安政

手懐のゆ社うね花も
重供

盗けて来る面自うね花も
慶我

初まきれられくおき夕か
弘永

數章皆古風之良有教者

之吉野ハ花と云ふてふは家

友静

工甚知費許多之神志

待種や花は五ふん花のま

風所

曲節卿々漸入正宗

之目も田毎の目をも奪へ

芭蕉

甚もやうくした個ふ月と梅

梅もあいの月と日れあふ山落

画中之妙景

幸時の春ハ花より花より

妙麗格も亦高絶

木のトハけも花も梅より

愈近愈遠所_ニ以_テ不可及也

蛇吟やうづハ忍一熊の声

水と目と花とくもぬき花

以_テ更にあふも人とは

まゐりや蜂の巣はくも梅の海

花の雪清ハ上野を流るる

幽玄無涯

古池や煙をくむ水の香

全是右丞之妙境難用筆古詩○
俳歌一多起四五十一年矣作者雖多
其體如出於一手翁一龍拳江左
初關自然之源終令俳道競美於
詩歌光掩前人澤垂後世猶達摩
初傳禪智者集大成也故其句正
寔不二世人不察唯取其平々者
以為三昧往々失之卒易嗚呼人
情憚難趨易不特風雅矣

之日や勝て雀の抱かり

嵐雪

不説祝賀還在其中老成

せしるは此公瘦きなり伴う拙活

此老句調之於焦翁也可謂瀟灑
惟變化小減而已

疎く能く見たり小家の

石女の雛かいつくそ表あり

雪の成とけりさぬ初多事 其角

真而奇

ふくは枝のついで梅の花

寫得高雅

水戸行ふそまゝ海苔は味

又、詠ふ梅子とて彼より

目下佳趣人還不能言

此堂までわが支障す

實境中有閒雅

花影相を交はるる

此等篇亦世所賞要似非本色故

附贅焉大凡此光一世之作以氣為主而意之所至筆能隨之蕉翁

江亦嘆伏焉所謂離而合者也近世東之風體無不依之者何其盛

ふくは又ちふくは花ゆふ

東

考生於賢

物くも是(て)烟(り)男(は)

藝形てハ意ト云てハむしき

上り帆の浪海をふむぬけり

神叩来ぬねくふむぬけり

此子風格可レ与ニ雪中ニ垂ニ驅筆先ヲ也
蓋蕉門関以西ノ魁

入夢の人

中第よあそ相のあ芽うね 度根 許六

許子多才其文可レ見終句自許性
々如目中無レ人而自今論之則枯
淡因少章易無ニ含蓄色老補筆之ヲ
修太過

大系や枝の出て露人跡 月 尾張 丈艸

啄木や枯木とさうに花の中

終日收々者尤可レ怜ハ

我よりと鯨の迹ー根芥か

宵半の薊まふも木芽か 凡兆

花さくもひかりけりも木芽 大津 木節

句意俱妙○木節雖警翁為蕉老
之親弟乃余之岳父之爺故余得
其家所藏翁之真蹟數帖云

花之仙の安之亦 酒堂

高意微妙

已亥九月白雲亭一夕書

餞別

知不足齋

面自平穩無二心方記曰

金入此一書之佳也

古集

片板一紙半卷而已 梅門記 支芳

之文鼓瑟然文集思索奇篇以老之條暢晉子之
述以文自高至癸句者與許六教
獨之政耳一論古今鈔等之
然語問亦有確論諸邠末
之教俾議之如鼓斗舞而足其邠所也長膠壯雅
之集思索奇篇以老之條暢晉子之
自放也如許括之論頗有取捨看泥
之則是指趙括之論頗有取捨看泥

逢坂のかきくはや初さくく 千那

そとくは嶽の形や梅柳

刀こも竹もつれく 正秀

孤島と花は落とれじく 同

我こくくね女あうく 汀雲

間瀬

お梅の光りおさふく 其芳

天人も泣顔わくく 已百

木風蕩揺く 山店

魚店く 不卜

そは海や村人集く 山橋

おまも花僕く 一笑

就得人 情 佳

日比新や 珍磧

寒心 刺骨

え目や 忠知

何れにぬよ去ぬき萱の如

清雅多而意充工

花あきて世とよ風はあけり

重軌

激烈

ぬるまの野とありや田原外

十丈

造詣佳

長松が親の名をきくは夢外

野坡

も兒掃除あてかり桂枝あま

花よ来さういふくぬる心

とけ

風吹ぬ日ハ我形此柳う那

校遊

詠意ノ之外別有リ詠意

酒の徳何と云てと花よ来

佐見 任口

飄逸

ふ月とる麻てききと二月の

鳴滝 秋風

租豪中有感慨

浦の香帆は接ぎもて来き

大坂 来山

え日やけきハ井川のあけき

興象極下

ふみ線も小舟もけきど梅の花

精確

元海地

一時ふけりて梅の花満ち

黄ひ持て梅起さう芽替居か

ひつてかく梅裏の草

和平尤妙尤是春興

月をれハき一日をれ山さう

花咲く死そふい病うか

詔意超然微上微下

古筆もふは誰もふふふふ

飯喰のきやあきそ果るふ

西山一派此子出而大成蓋而鶴

舊德其才本縦横而其句往々如

出二手港翁之風格正憂樂美餘

錯今古要是談林中之楚楚

ふいふてあつては柳か舊德

橘く香かう小せう文ぶん切き錦きん花か御ご曹そう子し

三章皆艷似讀公春怨妙年行等

いそ描んる菜をすふ就の因すて

心咲

桑の中や此と知りて親少年 燕少年 峯少年 嵐少年

神情為之動

横より双ひあはれそぞろ催ふ事
正典

人あふるにきうのたふし
利角

風出隣りて角

當未信之時京信德

古今題美蓉作魚出此篇者正大
順流而味無窮可稱絕作也

落葉をうかす花の林うら

言水

圖中裸子八人如都

そられどけりふれ一そらるる哉

ほろけきやうりうりてやうりて

同

雲鼓

隙放りやうりやうりやうり

逸宿是此ノ子カ之風調

室嘆の非義ハ智ひそまの梅

同

鷺水

日は夕ハ望みのみこ山さくけ

同

我黒

末閑ねんてりてきんたうり

同

辨石

風流

夜債て湯一始る聖川うな

感慨更ニ深し

花より大のそらぬ山もほ

同

常矩

料料よりふふ己がうりうり

同

竹亭

岫態の先眼らんまの艶

同

丈竹

あふははあふあふあふ白少袖

同

春澄

あてて目人あういふ描のゑ

同

貞佐

やうやう崔若こまぬ日とより

京

常牧

采の戸は鞠さく花の夕京幸佐
え日ハ大晦日のけり舟渡吟笑

渾成

苗代の鳥とおどる鳥豊後うさ 釣壺

友情やねえと云ふ花の面少女みね

山香と小松の跡は焼ゆ竹洞木

横は障る心事やまけり雲 林紅

有譏刺

鰯焼く隣情や窓の東 秀和

無幾怨而不怨者

花衣やちうふ鳴るれ拙なり 菊峯

とくあてふ人席せし様 惟中

人れおとせりおとさ様か 専跡

清不レ在レ層

空をふりやいへる児子よ歌 琴風

描乃ゝ急籠もさうに急

花の愛聞くは曉のやうなる

鈴竿

猿人よとせ脱きなりしとく

岩海

もを秘やふ門書色二本

蛸轟

可い不深味手

寝て死よが起て死よが花の云

西吟

ふうろがやうはうろが并ふ

立嶋

二章皆逸

蝶の羽の石やうもあてき業め

沾津

如月やふの分ぬ炭ま一俵

好春

亦作家之手段

花嫁とゆれふり月夜様

季重

狐ふは後れとやうと蛙小

秋航

宴よりく美人ふ人様物

破笠

思夜様
花界や大図様のりうと特

その

ふはうとく折やう春はあふ

可い無来山之作

眠くさう人みれんそ胡様

追くさう人みれんそ胡様

近時羅人カ之嵐山明々粉本此作而不效同焉

春雨や菊も穂さし藤花 如賀 相之

和平

之目も婦人さし 江戸 彈う 江戸 沾徳

仙鶴有句曰松人難老又會て又歩く世賞之鶴豈不見此篇乎

百姓の夢は流ひうらや桃の花

不中不離

常ののけもほそくさす

夢ふより休めんか 大平 智月

襟つく花守惜さるる那 伴奎

如月やまゝ夕暮れ 古柳

梅咲てお屏の家と 江戸 沾州

處々聞啼鳥

出女乃化粧の中や 木導

踏倒を祈り 乃龍

味と心と持ど梅乃花夕湖

清氣襲人

そとにても遠きも遠くをたふさ
涼菰

老成

秋挽て呵は出るや旭の花

桃充難賦前有梅後有櫻也此篇
組可誦

あゝ雲は春の始やかきり縄
乙由

漂落其人可想

蕨の昔法仕舞へる持た

妹ものゝ笑ひやうり山極

香艶可雙湖春之作

花咲ぬ所とをわめく柳か

む傍よ死嬌ひりり袖もん像

おはあし小日ハ形もあそび
枝わたりやあそびはあひり

旭の空より後を声やまきり
はんとこよ子杵ハあう蓬解

是等篇皆可取蕉翁之後此
稍得其風神諸體錯出不拘于理

俳言

是 三 以 其 勝 于 支 考 也

ふより月と持て之折るべし 母解

景情俱真亦似來山之作

ちとともろぬくいと様く 且 橘

まゐやふ品一高き巨燈 巴 靜

いとせのん柏子と芥子 無 倫

小男と雛の奏者小撰 鑑 水

新よ先反梅娘一山 京 可 休

舞うゝ人の這入り門乃松 吻 斬

虎を寝度も虎を中系 梅 雪

元日は同じ隠しそ人のと 二 夕

花よちあふ蜂追まくり追まくり 無 關

奇峭

寝る時どろどろでも下るや 崔 明 水

迎あふとんとあふせん花の枝 玄 昌

来る人の氣を初らし柳 一 海

采人のたゞに月には様う那同動樂

元祿二載言水編都曲集此篇
先於乙由之晚秋吟十数年句體
大相似可謂奇実

我のそと廓とゆく風巾松女ふは

まゝとくえりやうたふ所京定武

梅さうりふとく不の酔は色敬雨

予閑敬甫集寒瘦而合作絶少此
篇較得體

白魚や石よりくくははら江戸松風

永みれ喧嘩を沸て蛙う那遊也

興象頗妙

武勢中や薄の丈に拙乃系下野潭北

撞櫓あり初ハ様もちる合点江戸蓮之

雖事誤用可取○能因邂逅山
歌世人多為暮鐘飛花之意句句
作談柄余思不然也蓋因遊金龍
寺賞花遠巡至夕日暮鐘時響花
片自飛是時景耳而感慨在其中
矣安有鐘声飛花之義耶史粉因
之歌真卒可也微也如謂不然吾
其俟千載之子雲矣

新橋より田主とて侍妻の心とて

小娘の心は侍妻の心

ゆくゆくハなと流藤の末芽成

江戸

宋阿

出千芭蕉歌花吟而語亦精工

是位の花束あくる夕下り水

白老や風よ吹くそ乃川

譬喻如此則亦何妨

名のうゑに抱女すゑと清代の妻

ゆゑとけ夕日様や胸より秋

かきまはる乃背戸之山とら

加賀

希因

得春景

静々ふ庭と現けハ柳う那

志賀ハ今朝の豆めやじと無

だらけ水ととらとに俺自

是等篇亦世稱之而似失大玉類

近洛之調

此等篇亦世稱之而似失大玉類

表の間より一尺ハなと様う那

伊丹

坐神

老木も二筋三筋柳うさ

江戸

研居

秀雅

月さうらに柳より留る嵐中 去留
とやうても翅ハ初く小蝶也 柳梅

細潤

初は春やうく志てさるる夢烟は 風睡
日和月を習ふも水一花曇 原水

和氣融に

いさおて人中見えん山桜

無名氏

優柔

柴乃戸とわくまかゝるまじき

俳

菜入

逸蕩絶ス類ヲ

眼をみまひや蝶のをさけり 昨非
力るや雌ハ伸てろく難合 文十
ゆく水より口すゑにう白棧 山夕

清澄齒牙


~~~~~まゝもまゝの件せ嵐蘭

古選卷之二

俳諧古選卷之二

夏之部

接多々交也たあのかへ守武

五月た交もたあのかへ貞徳

接多々交也たあのかへ貞室

たあのかへたあのかへ立圃

たあのかへたあのかへ重頼



順礼の持中ゆく交野哉

そまてききき耳も非時と 望一

あく声ハ蚊の孺き似ぬ夕か

かろくふぬハ果て何と憚 西武

何とくふぬんて何とる夜更

何のゆくはぬまや去来子 似船

座間生風ヲ

そののゆきをみくがくき 宗因

超妙与談林之風體懸絶是應此

老之老命也 極りゆくは風中紙機

故拉は流屑さく夕か 由平

六月ぬき出なるは釣の少中か 西鶴

長持はまき強きり夜更 舊徳

多し流きてより一菱非 來山

有無窮之感

子也女もこれぬ抱ハ平哉

交川や舛て是少時も有



涼しき日橘風吹く海釣り

自然可ニ称ス合作ト也

時多ゆきそ惟子つツ也

林間ノ一声微雨將ニ來キ此時此景  
可レ想フ

時多裸て起て橘二ツ

是レ華江ノ之實境

夏ハ又冬ノありどやとされど

伊冊

鬼貫

豪宕渾雄百載之下無ニ緇レ變ニ者一

蝶の巢ハワルも物と交わら

ク立れ又やいけふ下駄をん

飄蕩ニ而レ不レ陷ニ泥ニ談ニ是レ此ノ老カ之長技  
惜ニ未レ見ニ其全集一雖レ然ト所レ錄ニ數ニ章一氣  
骨翩翩ニ可レ下ニ來ニ山一雁行上ス也

くやゆハリ金と銀魚粟坊主 宗旦

美様や為る通人より 是水

盡ニ世一態ニ何等感慨ニ妙ニ甚ニ々一

冬天の海とらふれや清き声 東巴



是つゝ這子まゝ下り夜更 宗瑞

妙在筆墨之外

け店あへちとれ時多 三千風

り日由何と兼ふ汲溪の人 辨石

るの日や門提てめかす心と 信徳

風神玲瓏芭蕉自東府寄書於  
洛日近上都之風體何如信徳  
和及我思之數人日相會討論  
焉不覺至飲酒數斗終作此句以  
贈焉宜笑其音節之佳也

且今年水の肩より暑さう那

鳴るゝと笑りいふにがととと み

小羊似為涉理以古來稱之姑録焉而

有るゝ子も髪あつとと黒く 其れ

是女流之興象

言念佛中は持の法あり 公羽扇

言軒小清き店に蔵り哉 如帆

蚊の音や押金うけてゆく 友墨



須ナ

麦草の笛の音想へ

南都

歳人

慷慨事婉

時多しうへハ仙よ伐さる

言水

有宮怨之感

君才も也益々螢の光縹ひ

佳麗是少年之遨遊

うれあて麻衣あまの星月夜

京

雪がのふうと胸をたふす其諺

水もふくもたふすやう那 負怨

すくくと花のたふすむ林嶋

丸有り琢磨

日暮るれあまのうさやうはるふ 常牧

栂の上よりさるはるふ涼介 負秋

秋風一陸が物を燕ふらた 反木

赤土の明きくもろくふのそ 竹翁

四人して水殿屋つらん女房を 好春



京より之葉とてじんばりふり

全

春香

之葉は人通りふんふん

全

只丸

もあまの如身もふりかたき

全

今水

意警切

あつたふりどりどりと

全

周木

可謂見得難見之致也

涼るる思ふふりてりり

全

元來

真得田家之趣也

棹添てふりふり杜ふ

全

助叟

杜ふりふり杜ふり

全

底元

似テ放實婉

晴るるふりふりふり

全

都雪

迷ふの泣く振り量ふ

全

流水

景情凄々

赤うん花の白るる

全

晚山

似テ理屈ニ非理屈



野夫  
竹の子ハ産れ候ふゝ音ナキ  
久住

著題本邑

六月晦又ハ名姓を川とわし  
玄負  
正直  
至貞ト云々  
三木松  
我吉  
目如るや標の葉軍人凡島  
理右  
和及

ととくと二日少めぬと衣

亦見作手ノ

定宗

沈練

知徳  
雲鼓

語極精ニ

友元



六日ふは茶社初子入る葛浦か 悟夕  
眠しとて二瓶を初く思ふと云 富國

奇趣

抱き給のゆ方清きすしと云 伴奎  
反移や越て坂一つふと云 方山

一吟 生涼

魚の仔子う拭てきる田植か 冬木  
一二里ハロよ村もく清水か 秋慰

榕一川ゆりもあー村もく  
一仙、はくもてふと云 初秋

杜若あやめ素子に湯と云 加賀 笑

是賦、燕子花也 上五字断見之  
正識其味

候橋のま一つわーに涼と云 親緒

我が新よ去柄の菖蒲浦 菖月と云 西吟

真率見其居可也 知句意也

上巻と云や粽のかと云

常古し未接あり衣文 一有



江の秋ハ清ムルハ涼ム

血江

江水

渾雅

其田子ハ其の敵ハ其の心

京

心号

加實

もふせは風中ニ子田

田

芭蕉

語妙、而意婉正、是清廟朱絃者

本ハ其の枝ニ叩く位

留別

後ハ極之使、つゝ別

愛ハ筆端ニ老

坡年

面、其之ハ悲ハ其極

見得、不切、不意佳之

一眠之後、子願、其反

友、其ハ一唯、其ハ一亦

日ハ其ハ夢、其ハ一又

杜陵雪詩曰、暗、度、南、樓、月

雲、其ハ其ハ其、其ハ其ハ其



卷之七 吟湊然 是風格之妙

一吟湊然 是風格之妙

卿のまゝに落るるものゝまゝなり

中七字絶妙

破風糸日新や弱る夕とて

極る援井省懷曰涙や插りあ

風調高華意思凄婉

至とれハ首筋あそび雲外

是調落中 晚者而亦前無古人

六月や峯よまをく嵐山

嵐山春日見花今也 溽暑唯成雲  
峯耳雖見嵐山而不克發  
蒸相對興感也句自然而意濃厚  
三復可始識其妙也此等句後人  
不克學之嵐以為風之義亦從國  
俗耳

子とて半流石の石後川 素堂

平易而端正

嵐雪



義丁ておつて振る螢火  
あふふよあふふ中地のわき縁

古きよらあふふも牡丹か

不培不難見得至人高尚之意也

あふふ身を祓ふら蠅のたき火

頗見作法之妙

あふふを離れとつて又衣

露沾

侯伯而有此作可謂奇矣

門前の杉火もあふふとわき

珍礦

あふふ影のあふふれぬ橋のわき

野坡

一竿ハ花のあふふやちり

許六

あふふ苗のあふふ令けわき心

木因

あふふやあふふのあふふれてあふふ心

湖春

樵灯のあふふ小鈴のあふふれ

杉風

流動逸群

あふふとあふふれて町のあふふ

臥高



立食て牛羹の室山部

探芝

新受雜巾一ツ山部より

逸名

松の瀬小舟に是て之を

思ふる所へ通ふは

有元湘東流之風

声あはれぬも

越人

是も時の人

柿の本は

涼

新詩

美妙なる

杜國

非東西南北人則不能作之

水の

去來

湖精液真傳焦老之風貴此篇惟詩

物



五言古詩一首

五言古詩一首

篇々皆佳絕莫爲遺次之看

元山の力乃及ふ如雲の如  
賀 猿雄

寫得意氣勃々

人の世も如く若く一々  
山川

素も如くも如く  
氷花

矮屋多如斯 炊烟満坐蒼蠅撲面  
給不堪讀也

幅斗入子

惟子社者中

船の如くは

卵の如くは

花の如くは

以の如くは

以の如くは

以の如くは

尾張 露川



日れもやこがれて思ふれき 正秀

故きうちやわく燃て君う顔 大津 杉侯

素心は涙入やわく 陸奥 等舟

面ふく 如賀 遙里

ふりぬ 大垣 如行

望よりと 同 竹戸

乳をてふ 大津 尚白

平穩

時考ふふ 時考

天真自得

郭云 佐渡 常之

八月西や 松芳

藤お 風弦

富廉得品題之體

一回 加賀 北枝

平淡而高雅



市中、物は自ひや五ひ目 九兆

蠅 進ふ味 夢見や此 其角

白面やがと回そ 秋野 常

俊爽如<sup>し</sup>見<sup>る</sup>

正月夜中見ふも所と夢人

有明の面記を けしき

一とふ。捨てぬや玉本 夢

夢とて言へ

たふの皮は 僻の法を

杜若を 水とて 夢人

風流温籍

け 猶 一 夢 人 常 や 夢 人

安滅<sup>いんめつ</sup>粒々 皆 辛 苦 之 吟 耶

須 工 の 此 後 も 夢 人

自覚

秋 夢 人 と 夢 人 常 や 夢 人

不<sup>し</sup>知<sup>る</sup> 真 家 然<sup>しか</sup> 之<sup>の</sup> 人<sup>も</sup> 亦<sup>も</sup> 有<sup>る</sup> 此<sup>の</sup> 心<sup>を</sup> 乎

於 人 中 本 州 も 夢 人



晴より又早より夕陽見  
亦芙蓉之真

蚊とやらや獲ぬる国の私漢  
夕すゝゝゝそ男ふせれゝ

雄放無倫

端半酒の肴は遠せり  
故きり少や故をふるふをひり  
ふせりし服も色脱く白く白  
世とそとそとありてとらまひ  
小女房は事にくるゝ足る

晋子才素縦横不拘ニ體是等篇  
皆可録

謹佛々目とあるよりちあり 支考

明秀

帷子の影ひハ易一渉み百

大勢のふ小蛇くゝ常々非 涼菴

白きものや月れゝのこ 燈外

春日怪白雲是芳山之常談  
復人不疑望而是雲也年光迅速  
世態榮枯可觀矣一篇造語如玉  
之走盤鳥妙不可言







松影は揺れしき田舎か

念人懐孟光

馬賣てと宵沸しん故き石 捨石

裏つゆくすハ新し新し 祇負

有天授

ふ月あやとて因ハあねね 有佐

堪重不折

ちとれ人のふく裸虫 來川

抄あ乃んるれそとさうふ 談中

腹食と母の髪は寝しん 湖十

抓むゆ量し金力 青蛾

人誰遇社景不無此在語

扱ハあのみが啼きん 藻風

語簡意長与詩歌者流可以参例也

駕昇の肩よそや 乙由

より竹やまれきハ未初と



少白はたふ不飛々々々々

所謂識面難識心者尤佳絶

凍一乃々々々々々々々

薛々々々々々々々々々

人々々々々々々々々々

二句得意作前篇柳平正而修遠此

蝶々々々々々々々々々

宵月夜々々々々々々々

宋阿  
林紅

鳴流在眼中

潭々々々々々々々

山姥乃二人おのり清水秋

風雲之身世堪瀟灑且語頗新奇

世中々々々々々々々々

柳居

玉々々々々々々々々

嵐蘭

裁萬葉之語終更五字而意足調

成尤為趕妙

里々々々々々々々々

野萩



もれゆく水線崎一杜若

伊賀宇多郡

たふふれ極むれう田面

魚目

抱毫や一年うりの中より

希因

みうゑのまや溪川大和川

桃隣

あふんく極て二見田面式

安元

高古

いん尻の輝きやそふん

簾線

はくぬ肉や花子の地まう

名護屋吟水

凍くや小きみの握回し

風叩

菊やうふとひて起る

來儿

寶鏡極佳

ふ浪はまの事うや海人れ家

流水

汗入くると彫く峠うね

雅蝶

口ととうけく能く稼うね

芦舟

ぐりうくと露をけけん牡丹

茶以

悲壯此惟牡丹可以當之



すーと牛尾とふけの中 万乎

杏堂の店の塙の星さく物

友渡と彩ひの中へ一川也 伊勢 如真

みりぬや清い流しに竹の音 原水

とろろや秋の清きと秋の枝垣 豊後 至ん

美雪のやちやふく一き中 なる

男のこゝろ多きふこゝろ秋の枝垣 花女 花崎

古選卷之二 終

俳諧古選卷之三

秋之部

皆人の星床の静や秋乃月 貞徳

平穩佳

月やあめ我れ一つの新法師

傘とさへ面やも物も秋の月 宗鑑

山姥と秋の月やも物も秋の月 立圃

秋の月と一足も物も秋の月 重頼



梅盛

春吟

湖春

蕭瑟

正利

平風

言水

梅盛

春吟

湖春

蕭瑟

正利

平風

言水

言水

言水

言水

言水

言水

言水

言水

言水

言水

言水

言水

言水



進 歩 ○徳又有句曰名月ハ亙る  
我乃婦也 雖不及前篇亦可取

はあそひ 夢花黄がゆい 如泉

白雲や 夢花黄がゆい 宗因

豪雄

タイ

細ハ花ハ見ぬ里もあつゝ 西鶴

紫ハ花ハ見ぬ里もあつゝ 舊徳

秋乃 當男ハ 夢花黄がゆい

秋乃 當男ハ 夢花黄がゆい

秋乃 當男ハ 夢花黄がゆい 來山

西戸 秋乃 夢花黄がゆい

金氣 鐘々

松乃 月枝ハ 夢花黄がゆい

直是自在

秋乃 夢花黄がゆい

秋乃 夢花黄がゆい

以温雅之調寓悲憤之思果為傑作

人声ハ 尾のあは秋乃 夕小 和及



初出てりるや此のき碓氷

是秋興

ふのりく声く秋の森をえり 亦佳

く乃月出てくや我竹亭

高出于人意之外

てめて奥の森探るのそ生方視 方山

森のわ角のてうさ世うふ 常牧

沈渾

飽ふらうらや月みたる夜 素堂

賦得是秋月佳甚

此ひらりやとてあけりる

飄然中見閑雅

月ひらりや杓らや本ありり

調高し

月代やびりふをえけく乃浦 鬼貫

あけりりとけのそあふあさのふ

渾雄得李青蓮之風 貞



古事類賦離て白く秋の雪

新水の掬むる兒坐乃る急

極近人意亦自超然

淋しき雪の兒乃る急

老蒼渾朴右大家之手段

みくわく破るるを似て之を月芭蕉

正大明白足看破千載

やわく人と休むる月

みくわく破るるを似て之を月

見盛唐之風格還難見用力處所下  
以人不充知其妙也友人雅因一

年中秋游廣澤觀月適吟此篇初

覺其精淺爾來尚公羽益甚云

蒼潤。有思食而不知饜者之意

芭蕉やわくを似て之を月

情をわくを似て之を月

情をわくを似て之を月



體如行雲興象玲瓏事々無所不

カレ  
有  
秋枝は鳥のさうさう秋乃雪

翁少曾交遊於談林中一日忽唱  
此句衆愕然延之上座無幾倡  
派云

秋乃雪  
秋乃雪

温厚而不露雖然蕭森之氣隱然  
于其間或曰翁遊越得此句風作  
山字示北枝々乃屢吟曰未如風  
字佳也翁驚曰吾戲之耳嗚呼北  
地有子吾道可以興哉

又月や六日を常れ若くは似と

清和自我成古者

秋海や佐渡は横へ天乃河

さうらくと秋海くや如常をた

葉ハ酒をさるぬらうりふ那

あまハ秋の雪一秋乃風

八レ禪

かしめくさのさうさう秋の雪とさうさ  
利まてうさうさう秋のひさうさ







吾かきく 穠く速白く 峰月

渾雄惜哉不令此老從事於詩

年家く 平記よ 八月もんと

論得痛快句も亦極酸楚

月よ入や宵曉の 母あり

一あが花火るもの ありき

古く腰もきくす ありき

秋乃を尾よれ ありき

一 長居 穠くありき 穠く

俊爽亦飄逸

又月や一人をけ ありき

見くも ありき ありき

清雅生動各自極意

西姓 芭蕉ふのりて ありき

流暢自在下之五字絶妙

牛 ありき ありき ありき 支考



動中有靜靜中有動可移合作

一や乃室々や草むしんと前

露川

後やんくまてりるりり

涼菴

可與芭老並駕

力あうりりりりや頃々の秋

一書小麻葉ふいふりりりり

許六

汁まの接し這入るりりり

多日や馬りりりりりりりり

如元

編りりりりりりりりりり

利牛

多りりりりりりりりりり

木節

風露肅々

けりりりりりりりりりり

目利りりりりりりりりりり

如行

是凡人之癖

残樹りりりりりりりりりり

残香



名もよりのけで同く樹外

野童

行林の影をけしとては樹外

壯年

行林とぞうそと樹外

史邦

う灯を臺とけうに樹外

千那

梅かつく母ふおふと樹外

凡兆

上りくと下りくと樹外

柳は種のをけしとては樹外

越人

ふちに米煮く種のを月夜外

おとろくも樹外

尚白

おとろくも樹外

一回りもけし人樹外

名もよりのけで同く樹外

去來

語近意幽真是中秋作

龍の洞は草の臺外

龍の臺かつくや親乃良

栗柳と目ゆとめは樹外

半殘



蒙平日傭出之河の垣  
利合

老翁之孫之振之河の垣  
野坡

是此人、之得意者

若くは此の地を親しく林の風  
荷弓

風流の地の中、此の地を親しく  
丈草

聖天子の御座の地を親しく  
越中

前入りの地を親しく  
嵐青

梅妻の地を親しく  
嵐青

主の地を親しく  
惟然

若くは梅妻の地を親しく  
二水

主の地を親しく  
二水

世情事々如此、妙甚

伯、稻土の地を親しく  
百年

二水、此の地を親しく  
智月

盡人情

梅妻の地を親しく  
中意



枯のうらぶれし世に春風

来り秋ハ風もてとふりたり

北枝

高雅可入ニ嵐雪去来之室也  
中より好いところハ神と云ふなり

るとり松の葉をわたり

桃隣

隣在蕉門ニ亦知名句格浅卒殊甚  
此篇可見

同灯と切れしやうは

木因

松の葉をわたりしもの月

呂九

世縁鬼柳我新りし

甲府  
一映

夜のひとと裸てききり

鋤立

豪放奇健有鬼貫之風

芦の葉に灯ありこむ

立志

みゆき花の小うさぎ

氷花

我馬の柏子新りし

巴風

能くは新りし

千之

驚字奇

葉よし新りし水と

醉滴







こみさんと杖は突きり虫の声

伴委

きしの女婦誰せん竟糸

十人

夕暮の野麻や角れもの糸

風水

出雲  
ふし由之作大相似而是應先作

野吹り捲る糸かゝ泥糸

琴風

葦やまじく此花の出来

杉風

む念糸もどかぬかゝり糸

笠翁

砂浜よりとらぬの紅杖の縄

隆平

月夜をなみ来るお糸の糸

呂洞

諸篇皆鐵中、錚々者

舟もか帆も風も色並糸

一品

景情俱備

林も山も水も是等門秋の糸

不角

きりきりふきを花の裾裾え

調和

難ハ別々門田れかゝり糸

水抵

お糸もそ度もハ糸の糸

負春



漂落可取自孫明復之請凌化來

徳島県立徳島南高等学校  
伊原松

寶桃妖  
 寶桃妖

希因

堂中此器新家非乃舊也 其談

大正  
 休年

高秀

行月と抄の邊の海老色水

1870

欽定四庫全書

楊子之精

110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000 1001 1002 1003 1004 1005 1006 1007 1008 1009 1010 1011 1012 1013 1014 1015 1016 1017 1018 1019 1020 1021 1022 1023 1024 1025 1026 1027 1028 1029 1030 1031 1032 1033 1034 1035 1036 1037 1038 1039 1040 1041 1042 1043 1044 1045 1046 1047 1048 1049 1050 1051 1052 1053 1054 1055 1056 1057 1058 1059 1060 1061 1062 1063 1064 1065 1066 1067 1068 1069 1070 1071 1072 1073 1074 1075 1076 1077 1078 1079 1080 1081 1082 1083 1084 1085 1086 1087 1088 1089 1090 1091 1092 1093 1094 1095 1096 1097 1098 1099 1100 1101 1102 1103 1104 1105 1106

人打心

三  
三

卷之五

明孝

卷之六

*[Faint handwritten notes at the bottom of the page]*

11



こゝろもやゑて進むる膳の上

孤屋

牽牛は菊田と流るる煙草の

宋阿

夢の花や観世の如きなり

新異

物多の流るるハハヤーナニ夜此篇人多多稱焉是易之意而已以天吟笑

本不奇故不録

ふちの碓ゆるー秋乃る色

晩山

對彼識我忙也

朝夕は月を子にさかす踊り

豊後

王人

踊りて花の簾とくさ世外

原水

今更くーとひさしめをいふ

雞賀

杉針や櫛の秋よりぬき

高政

あのをきてまゐりて知る

大坂

初知

秋乃ちや入目れ果の種あり

坐蓬

寂々寥々

拾う物もやうー草乃る

京

岸松

ふれて流るるさるる麻の類

芳室







酒りたれわさうさうふま子外

西武

用難用之語大見作千

抱て床ても肌ハゆるる火桶か

貞室

馬合羽寄赤緋人神とろ

令徳

おれあうハ氷さかかん雪れ花

江戸

玄札

波たぬ水底の果さかうめ鈴

鉄

木の多ふく嘘と月夜の町お

越前

日能

旅は巨魁求てあゝる修心

豊蔵坊

信海

嵐木くじしく堂おれ庵

子英

雪りくやふあ士の物かろ

堺

正甫

○此篇見毛吹甚佳全脱當時之調ヲ  
煙もすけと白ふ二の書亦好し

大平日定まれば世に空く那

西鶴

そをまをいふくやこのうすなる

舊徳

此句亦見五元集末知孰方是

時を初まふくやハ何くそ

由云

所まふく約隅もふくむ方棚

由云



ももさるお花のひをきか 來山

我唐ふは能くそるるきき

何の本く言とまふ一帯に

氣を省く言く燦拂 幽山

物書くあゝ西のそるふ 鬼貫

物移く氣もこころも枯れ

後裔や煉か湯とまの類かろ

平正モ亦佳

煉掃のそる思ふ候乃宿 望友

奇思不可多得

始のハ落をふる小夜時

火の彩やふそ書く相代守 言水

白雲を維撫のそる年々

飛の野ハ方々海の寄

コカテ語盡意不盡果為合作

かく近も雲をすくや 鷺水



定家公の御書に

不角

大地の味を

湖春

ひひと

ひつげと生

露沾

そとと

素堂

そとと

壯而雅の一作蟻道

美しそ人いふらん

茶

京

如水

唯一つ

同

明水

そのお

同

鳥水

山

同

観水

深

伊丹

鷺助

の

信德

与芭蕉同調

常盤樹

忍



さる人ふはけ人さふー古神ふ 道澄  
茶吟坐てと松乃十ふー 滴水

田活

さる声や若女あとりあ人 遊也

意氣勃々

紙あふハ物さあふや神叩 子葉

張るや若女あふも浮世さる 雲鼓

日あふハ地さあふあふーあふ 風子

さるふふふふふふふふふ 金瓦

用此語作句亦復難故收之

さる又さる人けけけけけ 芭蕉

さる屏の松のちのやさる

さるかともさるさる枯尾

塩網の歯蒸もさる 笑の店

平穩中寓無限悲涼宜矣 摩晋子カ  
之雄高也

寝けや朝もさるのふさふ











燦擗てゆやうに家内

月下

嫁入の門もさうり神押

許六

新異不易得

様中

大名の御方ふと藤より来る

ふきと藤あふくまふに藤く

李由

初老や人の様煙ハおの国

桃隣

る何と声と枯野の風外

曲翠

わさくれや二百出しては忍

涼菴

内面より千ひより家格とく

おくおはる声からくろお相い

吞舟

牛馬の喫もふくで内面

浪化

初老や樹屋に見舞はるの内

錢芷

我形も表よりんは枯草

智月

此老婆真可畏

長くくの一節やおれ系

凡兆

我蒲生いづく様のそそ

沾圃



吟る雨の早々こはんと枇杷の花 乙簾

有十九首之遺意

うゝても方てもそれと云ふ 原水

支離馬於一枯野の暮ぐ 風洗

連もふくやふ枝られを付 露尺

三章皆有感慨末易優者

山樵のからく皮もぐほひ 路通

いぬくと人よまゝの山の手

火桶抱て願願とからり

我もゆく只も遊る火燐 立志

斤乃ハ且此著もあふ枯野 木導

多程のどてはてして紙を 其の

声せぬと瀟湘吟を神叩 法三

雲のふく様もひんてそふ 一言

森ぬくろくろふとくひ紙系 敬雨

傾揺や様もふ候と世れ 閨月

越後



月と折よ竹<sup>たけ</sup>さくく<sup>く</sup>西<sup>にし</sup>の<sup>の</sup>氷<sup>こほり</sup>花<sup>はな</sup>

氷花

枇杷の<sup>もも</sup>ふ<sup>ふ</sup>梨<sup>なし</sup>の<sup>は</sup>る<sup>る</sup>さ<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>り

巴水

愛調之秀雅者

海山乃<sup>の</sup>多<sup>た</sup>常<sup>じょう</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>り

大津

乙州

蓮の<sup>の</sup>を<sup>を</sup>花<sup>はな</sup>の<sup>の</sup>り

尚白

ソ<sup>の</sup>の<sup>の</sup>り

木節

若<sup>わ</sup>の<sup>の</sup>り

唱<sup>うた</sup>の<sup>の</sup>り

旬兒

尤盡人情

白き足<sup>の</sup>の<sup>の</sup>り

春朝

一<sup>の</sup>の<sup>の</sup>り

野水

花<sup>はな</sup>の<sup>の</sup>り

伊賀

順琢

細潤

い<sup>の</sup>の<sup>の</sup>り

字先

能<sup>の</sup>の<sup>の</sup>り

老鼠

國<sup>の</sup>の<sup>の</sup>り

越闌



今世に類する詩の峰

可謂勝平晋子之囑

尾院の心なる生海風作

亡友移竹溪愛此篇曰真得景物

劉歆の起る友なる

口のお少家と松又文玉外

詩書を又ふる也一因る

行家ぬあるを詩に也

冬山

凡兆

杉風

凡兆

冬山

凡兆

冬山

考噴飯



祖父祖母の京をもまき十数

よりかゝれ御も様と掃せり

吟もすも懐きもあはれを

いそがし兒女のためりや馬車

竹幽

分陰可憎

きき声や儿あゝく人の心

幸佐

色くのみ中れ果や丸隙中

柳居

情もとはあま官もあゝ水車

蓮之

果は皆佛のるく落葉う那

数章皆精工而典雅

信法セイヤのる葉も車や湖乃上

沾涼

とねらりし甲斐の木のや田の浦

布仙

えくくは葉一ちさの枯ふり

柳水

妙唱尤為不易

母も心はあはれを乳房チハナか

琴蔵

雛の尾の上へつゝあやうか

耕雲



手紙やうな装束の灯籠と

輕舟

一、佛之教

宋阿

和平高雅聯歌者流亦應ニ唯依一

埋火や北辺の川に流れて来る

方<sup>ニ</sup>前<sup>ニ</sup>篇<sup>ニ</sup>末<sup>ニ</sup>易<sup>ニ</sup>優<sup>ニ</sup>劣<sup>ニ</sup>

電や麻の糸で紡ぐ

初也や

煉糖スエーデンの蜜ハチミツに糖サトウを  
加へて

加生

門系家士乃乃日此字之成

沽洲

児の親より主としてわかれぬ

遊安  
夕霧

秘寶の徳令て以令之れ

永吟

可為三笑

大系論之怪一室乃紅

晚山

物より二物所収の多き

巴靜

初代の鏡とい物を一と云

希内

を此野ハ世々之の命也

如竹



吏明

素龍

露川

立吟

清空

古選卷之四終

古選卷之四終

古人曰：「詩有六義，一曰興，二曰賦，三曰比，四曰興，五曰雅，六曰頌。」  
此詩之旨，在於興也。興者，起也。先言他物，以引起所詠之詞，此詩之旨，在於興也。  
此詩之旨，在於興也。興者，起也。先言他物，以引起所詠之詞，此詩之旨，在於興也。  
此詩之旨，在於興也。興者，起也。先言他物，以引起所詠之詞，此詩之旨，在於興也。









俳諧古選附録

杓子此目はわつらりと月の表

東  
仙鶴

海龍陽ふ秋風をく海を賣

今やまのころより富士の裾野に踏牛

い糸湯花の中をそそぎて嘆よきわ

踏ふみ川が流るはまるくてはまるくてはまるく

鶴が之の體は近く干干粗豪此等篇皆其佳  
處。 石子も年々生る物ありふるあ



食したるはゆるぬ梅の世でも

知石

貝紙透て風と又乃室より

練石

田の人ハ生て度るに個傳あり

大圭

水は至も妙のやりり

冬と後る人ハそり人花の道

隆志

玉堂常 雪もく初の名あり

一枝やうり梅も梅のむ

竿秋

ふりや家宿かゝるか

梅の形容

梅の種乃 雁く鳴る人梅梅

山城の山のまゆや門乃本

雲扇

雪も梅の冬初るまゝ

葉梅よこ地のわらさハ風は

丈石

雪の種おそりやうり

佳致

こしれりよつとや我の調は



龍山

羅人

くもけやけやうき人乃初きり  
月うらうら月夜を思ふ  
るもも木も人の声あつたか  
おれ月や道にの清も聞ゆなり

渡ッ得雪趣佳絶

吾野もて世の難ぬれう那

宋屋

趣<sup>出</sup>於<sup>上</sup>画圖中而不<sup>レ</sup>妨<sup>其</sup>佳<sup>ヲ</sup>

俗衣もてるも思ふにやれ峯

あゝぬ国士夫婦と妖て踊るの

焼掃や幸螺の奥は水の音

人の据はれりるるハ踊る

普求

未<sup>天</sup>来<sup>王</sup>はるる花の出雲帳

八百茂

皆嫁はるる新橋へ踊る那

とことふ下るるるハ柳

太音

ゆき<sup>枯</sup>ハるるるるるる

因石

鈴寄車は蝶は同じて掃ふる

春雄



竹詩 白邊 竹金

我内へ鳴きてまゝうゝの如 風狀

今更て夢よゑくや時を

白梅やうきハそと 蠅姫の 波光

八橋やや井の底の夢に 宗專

初年やうき夢の家内梅さく

花咲やうき夢さハ因縁 武然

梅向くやうき夢の聲

犬薺参のうき夢 春堂

かゝまゝと梅さくさ 修古

夕鳥や女も目で借屋に 文鳴

久月よあゝ半の口を 賈友

梅の夢で夢さく 紙隔

そこふみで友打さ 梅乃花 儿圭

白梅のゆりく 夢さく

うき夢さく 非心非佛

え見やゆりさ 移竹



ひうくとすハ枝の梅の蒼きり

真率自得

夕風や是もひうハ涼きに

紫陽花を盗めは水ど浴せり

け舟は一あゝほやうの月

あつた月の栖や大二十日

此まうう杵二本の回イキ

神ア月く我歩をる乃系

亡友移竹 近頃好作古調一今取法ヲ於  
元審諸名 家也 不厭俗之誠譽云

花咲や海トのはやうなね多 乙澄

雪の日や大名ひうり真白山 稻起

きぬ乃とまれとほや初瀬の町 達三

あううくハうううの巨魁 漆桶

福聖天子の家多一乃ハ二 我笑

く一森木賃も苗と破れ 千虎

床て休む日そ皆ハ枕をぬ 片路

宵けハ下戸の命そ時多 九穂



風中萩の光のふかし

寛留

焼栞の光のふかし

鳥曉

帝の光のふかし

申輔

立月西の光のふかし

士髪

雲見月西の光のふかし

桃咲

雲雨の光のふかし

稻太

肥の光のふかし

長流

萩の花の光のふかし

孤舟

萩の光のふかし

蝶夢

焼栞の光のふかし

一杏

浮雲の光のふかし

蝶車

交りの光のふかし

提山

地盤の光のふかし

都夕

水の光のふかし

可鉛

川水の光のふかし

管子

父涼の光のふかし

珍志



花のまゝもみ

浦

おののまゝもみ

可幸

まゝもみ

凡流

は凍まゝもみ

井

花のまゝもみ

秋水

遠まゝもみ

巴東

まゝもみ

志流

まゝもみ

分川

蛇乃見まゝもみ

杜口

山風とまゝもみ

鳥門

名山東中よけ

麗白

蝙蝠やまゝもみ

如磔

彼先と八朝色

杉古

花のまゝもみ

疎交

雨まゝもみ

雨遠

まゝもみ

石波



東坡先生集卷之四

山溪

雅因

足跡分據古今

[illegible]

浪厚

二、*Handwritten notes in Chinese characters, likely bleed-through from the reverse side of the page.*

祇峰

此乃相傳之說

伏見

鶴英

平風子 詠家之成如無此筆

九龍九子傳圖卷

補遺

後世の業を念ふは佛

105

水 九

又曰：風動於上，水波於下。

澤翁

かむ川と魂のちやうど

素白

11.11.18

百五

此の世に於ては、

文山

*Handwritten signature*

關 五

五、六、七、八、九、十

貳拾五



浮遊の糸やすらん葉吟

楚崔

一色の花乃も鏡の如し

無名氏

水乃も同じく信じて寄るもの

州山

風や宵くふゆし松乃も

玉指

風の神帝とゆゑ夏乃も

奇仙

夢と夢やあまをぬかす竹の筒

宗古

花雪の役よりそかり烏帽子

松阿

跡浪の揺るる比やその家  
木の下み枝子あそび花の種

江戸

春來

渾朴

新月の中は星や女は星  
年忘りて念ふとあふれ

能中ノ之佳境

鴨とぶやかりたる水と雲の音

芝浦や車の上よりつる霞

超波



さうさめは枯木雀もそ山様

我やねをうつれて嬉しう何

暮やせよほろもそ花乃咲

波近世名手聯句而発句似不所  
長ナラ

すーさや寐さひあハ佛あり 曲菴

温梯やおのまうをさへ落るれは 存義

四布五布此の隠家のふらん

氣入乃調をさうりそ

と物種とあそ門掃く男外

おうーろ有や火桶の掻くろ

子くろ振るまふれ鼻の先 湖十

野へんは踏接られて寝さ 買明

何勝の味おうーふ頬と忘る

ともろこは枯叶かくそ 平沙

おと揖とみ揖の尻や 采仲

ひんたのふふ 祇丞



舞ハヤの干くはあわさる

祇長

あまの日のやみおほとくし

祇徳

あまのふりひりり花の山

有<sub>レ</sub>色有<sub>レ</sub>情

あまのふりひりり花の山

渭北

あまのふりひりり花の山

超雪

あまのふりひりり花の山

龜文

あまのふりひりり花の山

旨原

太刀持ハヤの干くはあわさる

有<sub>二</sub>晋子カ之風

あまのふりひりり花の山

黒露

あまのふりひりり花の山

由林

あまのふりひりり花の山

正興

あまのふりひりり花の山

清泉

あまのふりひりり花の山

庭臺

あまのふりひりり花の山

萬立



月と目と交さるゝハ師を以

蓮谷

此人近。撰温故集。艾枰頗集。惜有未入。穀者且悉。干開以東。疎干中。原而比。他撰則不同。日之論也。

る箇中の言ハ後の二例様々

梨節

格とせりや氣味の韻とあり

逸志

語意俱麗

あるふ狐の付て舞ねば

紀逸

洛宋屋古稀此上ハ足とも易し百子香

我臍も光るる小蛇よりを

右佐

澄るるや下るるはれて梅の花

乾什

淋しきや々々々々々々々々々々

田社

あゝの痛と振向てのふさふさ

栖鶺

猪曳の唄と投てむ師を以

百菴

る士乃論小蛇よりを

太祇

七弟も夢よりかきり上る下る

太祇

夢や雲をぬきしき古師殿



柳 柳の葉の緑の如く  
ちうはくはく個も石玉く

燕村

老成鍛鍊是素堂之風骨

真乃海濱日たらく水

平淡而逸

縮みそねが中やしや受

ふしを我松伶ら神押

祇村近俱居洛雖然提文江都之  
部者以具調耳

蜂の巣を窺ふも人か

樓川

口癖の芳世もまの行来 大城 淡々

古森の格のうきとやび冊非

高秀

五月雨にぬと候てまふら

晴 中 原の中らうと

秋容秋興甚佳

唐松のひらう通う神麦水

本くのをやま富海をる  
使も春をたふさじ佳



の山世界の花ハのく  
常ニあるハ顔ハ余るをさ  
サと志中の中もあひま  
ヤ川もあつておの終外

蕉門 悲人 愛體 也以馬外道  
而有音節自合者今所録皆可想  
也所選者亦自庸中使々而是多  
二三十年前作耳庶以其知滋  
牙者如日增耳則吾不知

わの水と氷と度類く 墓 紹廉

えりや氷と改く 眼のはり

初物り 喰までおう 二月 蚊 布門

短夜やみ系多く 眠馬

罪係さ女りて 土用于

富廉

橋ハ入て系履て後く 暑き 法策

抱々竜の世と愛り 火桶外 耕川

語意俱笑

後ニ 西蜀中 別 花の標外 富天

大井川 海道一乃 其れ



七夕の装ひ晴々夕干也

矩州

足破断見

名月や人定つて秋の月

あさしもこほりまは中川也

五姑

土気も沈むや宿の星もさか

夫婦別ありは七月八日也

田鶴樹

おやおや雞のつくろも菜賣

舞雪

白晝帯て麻と打や山楳

鳥窓

碎て床を人ど町つて月夜

晚鈴

皮一重下ハきくもね西瓜分

婆束

日の初やけりともて又五月雨

社笛

生れ生れ今成るり夕涼

茶雷

列ねくのーくれや終綾少流

五楼

天う下あつハこ日乃胡亂也

来汲

大やちやちやと足ふりあき

李雨

お細い鯉一とや京細工

几掌



乃くさのみさせぬ菊式 周木

五ふてそ介馬一様後 叙父

縁う結き何れと重非 芦文

候絶子柳ぬちと時与 呂雄

井の株乃大坂くち日初非 來草

怜うや我て三代不れ凡 魚洞

鳴ル柳ハ人のもてぬ外は秋 伊勢 麦浪

夕鳥やそ愛乃自生も花の因 杜陵

秋林一ひより切と琴糸糸

妻も来るは帰るは奴家さ非 温故

一粒も思ひハ朴をばうと実 何声

可レ以教誠トシテ

初光も目よ慈のなき枯野非 其口

啼きの新影と枯れくか 麦茂

新田より人もあふてや樵の云 雲裡坊

妻もやそりれくち柳非



神を竹のくさうし稲を佳



父帰郷し 海に枯木水

子恋ふに 来声平林の笛主

水と帆のふりかへ 海を舟

と来れども 来ては 離れ

樹々の影に 中夜を

支ふに 何れに 離れの如

時中 舟に 依り 家の一

神宮や 子舞 聖乃 影を

神宮や 子舞 聖乃 影を

神宮や 子舞 聖乃 影を

神宮や 子舞 聖乃 影を

神宮や 子舞 聖乃 影を

神宮や 子舞 聖乃 影を

神宮や 子舞 聖乃 影を

神宮や 子舞 聖乃 影を

神宮や 子舞 聖乃 影を

神宮や 子舞 聖乃 影を



風や花柳ひらけはし

田兼

田兼

経夜や淀のつらき花

周勉

周勉

日笠や枝の枝のさる

秋房

秋房

かきく子と洗ぬや大

青魚

青魚

湖のさへ世々あはれ

同成

同成

物やいふも物をしる

同共庫

蘆洲

戸障子の外と内と

乙貫

乙貫

看所のけしき

只川

只川

浦乃妻ふも花と

涼帝

涼帝

独寝のさへ

寓意新

羽衣の森心現く

以て一

久定

里丸

初言や

上野

梅布

蛇も

出雲

杏村

おき

結城

雁宕



卷之五  
 五

6. 15. 1944

山想

for my 30th birthday

文江

後里英

महाराष्ट्र राज्य सरकार

能移

一、張中一人進復(四)

一 鵠

Handwritten signature: *Wm. H. H. H. H.*

兩律



ふと吟をき行くと竹の歌の  
長崎 槐枝

一日ハ花と宵中よ伊予の  
但馬 嘯子

とらんをきて依りハ根の山  
二名氏

時一ツ越ぬ田原の一期  
参河 無人

千梅  
湖西

古選附録 終

俳諧古選卷之五

雜之部

ふや始老の皺をきれり  
玄吉

かゝあらのとちハやうてさく  
大岡物解出乃乃

雙關 極精練

流るるに  
後の下小ナヒミナク組経世あり多クと云てかく

吉公勇守孤城道傳  
鳳關浩博  
絶倫真為一代山斗聯俳名其緒  
餘耳起々干城其公之謂與



いもろろハ遠くへにこそ成かれ 忠盛

ちも花と遊ぶけそり風哉 定家

系梯花の縁より縁ひぬ 爲世

とわじくふ東かゝるもろわん 光廣

武蔵中ふろくこゝいれおあうね 無名氏

此句相傳一名公在東府所作蓋  
元和寛永之間也

ぞふ知や面のやれ秋の雪 肖栢

くーのふは道あるも思振哉 長明

目よりしや卯月八日れ花を 紫野 一休

花芥ふれき常すしひく夕外 嵯川 親當

ぞハ松系良のきで柳系非 宗祇

梅のききききききききききき 宗長

星の神はひてほーれろの江 宗養

梅の花きききききききききき 紹巴

号もききききききききききき 利休

花の陰うね世は何れ孫花 宗甫



ちり花は南無阿弥陀仏と夕々那 守武

舞 舞世 舞 舞世 舞 舞世 舞 舞世

世 宗祇三回忌 世 宗祇三回忌 世 宗祇三回忌 世 宗祇三回忌

二季 二季 二季 二季 二季 二季 二季 二季

あり あり あり あり あり あり あり あり

世 世 世 世 世 世 世 世

海 海 海 海 海 海 海 海

水と結ふ月もも事うたをわはまハ夜うう  
とぬと神風うはれぬハあううやううとやうく

月 月 月 月 月 月 月 月

優入中古之調

聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖

世 世 世 世 世 世 世 世

客 客 客 客 客 客 客 客

我 我 我 我 我 我 我 我

世傳室遊吉野得句也春部其年  
東行作此二句也自以為得意後

世傳室遊吉野得句也春部其年  
東行作此二句也自以為得意後











白亭

中よりせん 藜の杖より成日迄

塚も初け我位声ハ秋の風

蛤のうらたよふき新秋を

初月やゆいゝ家此あは新

平易○此句 湖南有真蹟諸集皆

情を夢やこころあはきと夏の月

口号亦自高

至新よ米春涼心長く

かゝる人の小神と今や去月平

飯取く喰ひ残きや夕とくそ

百篇百様真大家哉

冬風や互よ夏より白乃秋

梅白

友人 燕村 歎 称 此 篇 曰 風 調 高 華 意 味 優 長

梅は病て夢ハ枯ゆふけ回る

叟生涯 嘯咏水雲至没干 謂四位宗氏之流垂也近世



經歴海内自術之徒滔々皆是也  
至終今人仇視俳家者流可為長  
大息矣而濃之一派尤甚云

花系やうと  
しつゝ中よ老とわつ花族  
嵐雪

婉約

新 自や内竹木の株乃草  
は深菜菔の彩は傍うとくまうやう

草の傍は地獄りうとくまうやうて  
け田の混化虫をま

己く飯鬼よ似ううよ 蚤

花の夢にわくは苗うふ重うえ  
此

浮城の門とちとゆうとくふめを  
出月のあ門はわうとく限あてとれ

うう花は月名に扉式

寫得區真

常や弓よとちうてはの声  
世俗と有恵んと云て

物もあうとくね火燈  
女と花サリて

お乃鈴云蒲団も被さしを 其角  
百載之下今人断腸

松原田今ふの至休



我客と思ふハ将一に上

淡々得眉山之意

昔のりき来うの言の故き外

有國風之遺意

陽をよみ来ても初と虎の耳

中つに達神あるを雲と云ふ

白雨や田とくめぐりけ神ある

能翁亦應吐舌

能花や前う目よふふれ山

能城のまをさうや假乃宿

能の板宮後くふゆくき

右調亦佳

細きて細き言の雨夜哉

愛格是監觸後世者

燕も乾くくさふくさるる

傘持ハ月はおくく次女



散入中より、（？）頼に

楼に花をぬ女中出する

子、夜更衣服、中へ姫子強

引く（？）母をぬも、（？）

中より、小使、何れを

とて、（？）かへて、（？）

朔風臨霜。歷々、在眼中

筆の端、（？）の、（？）

居 芳樹

婉 藤佳純

破也、（？）の、（？）頼、（？）以、（？）

調柳

星を、（？）、（？）、（？）乃、（？）、（？）

尚白

侍、（？）、（？）の、（？）、（？）、（？）

鷺水

木、（？）、（？）の、（？）、（？）、（？）

信安

天、（？）、（？）、（？）、（？）、（？）

雲鼓

た、（？）、（？）、（？）、（？）、（？）

轍士

た、（？）、（？）、（？）、（？）、（？）

方山



吟 涙中んじう刀そと菊分そと

つーめや巨燵まてぬ隙る

春澄

ふとぬく力も折て松乃雪

子葉

有曹氏之風

すももこま小端洗ひー

曲翠

子ちりも軍まも懸ー

支考

新異俊逸是此老之絶唱

一ツ葉や一葉ふー

花の咲木ハハそー

梅折ハ鼻とさー

沾徳

松多て常々旭も成みり

不角

聖具も抄子果鼓乃る世

銀さくしやうと且の館の壁

負佐

麦糠は縦屋の店乃る

荷兮

太宰府と通り多う小女ものまぐ

一萩も免しそ

卯七



惟然

世の中と這入るや蛇乃穴

月  
標  
圓  
は  
志  
を  
く  
く  
一  
初  
哉

孤  
岫

懷子角慈之はあゝ死なな

通七苦之汲收山清水

三章皆整肅謹厚可以諷人

我忘八難七噎也命之

嵐夕

此石原出麦をけ

冰花

金のみりし青砂よりとひまに母の  
しききふしむくさなり

以魚紙祝之上也

我と連て我新の月夜

素堂

雅如ふやうな子子のややひひくく飯飯くく秋秋のの暮暮

尚白

如く教のありて是て凡一誦

落梧

行 子に如 きて けと 死つく 所 けが

胡及

上野田連  
 美川其の川常あき罌粟の白ふ

傘下

花子 極 子 子 子

越人







燒火

思ふふやを

思ふふやを

人垣

千川

月影

思ふふやを

思ふふやを

不卜

不卜

と

思ふふやを

思ふふやを

此筋

此筋

不減西行白峰歌

帝才

思ふふやを

思ふふやを

去來

去來

くる

思ふふやを

思ふふやを

花の形

花の形

父白

思ふふやを

思ふふやを

花の形

花の形

解

思ふふやを

思ふふやを

百里

百里

雨夜少ぬ

妻

思ふふやを

思ふふやを

守

山川

は

思ふふやを

思ふふやを

不器川

不器川

相槌

思ふふやを

思ふふやを

天海

天海

を

思ふふやを

思ふふやを

十九金

十九金

相傳此人生平不効能一日勿心有

此作可謂奇矣

す

思ふふやを

思ふふやを

敬雨

敬雨

暖

思ふふやを

思ふふやを

常牧

常牧



禪ハ竿よかせ川をく終 木節

卓澤不羈

百生りて来ふがおそき椒

杖よりてききハ焼ん様持 如泉

んよきき人かゝあゝ次への秋 言水

お様よあやゝやけり次への秋

梨の花よりりー尻りき佛を

清き水んよき長柄は柳をさ 我黒

初よりハ竿の一きめ始るー 和及

を固や杖の様乃落る 良詮

合畜濃遠 亦右至蘇州之妙處

我るる供よハヤリし杖のむ とめ

頗見真趣ヲ

りう云て大木もかりー桃の花 亡名氏

きぬんは煙中ハ煙の権のり 言水

期不<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>意在<sub>一</sub>言外与芳樹二雙之<sub>一</sub>作



祐成毅と吟時も時宗ハ會はり

曲翠

主人花は酒のヒ交遊云はるぬ一ハ笑

うや花の面は杯と星小らん

おしやま一杯のめはて福減る

留鶯亭

月は揉むや一夜はこりのかりと云ふ夜ふと

季吟

数章皆出一律、破格不可、以爲標準、矣、雖然句意老蒼、非窮衰態、則不能作之、初学惟弄其筆力、而可

裂葉汁むくや破葉涼き清梅

正秀

蓮のうきやむてと同一他の中

尺草

去秋不々々  
深小、雲よりゆりーと云ひて  
月乃祇やま。一、

古つの子はかけてるをわき

澤塩

生花鼻ともあつて流石小平家

涼菟

ハ流く、や、と平家、と云ふ  
初、游、讚、州、作、句、曰、非、は、生、花、鼻、と、も、  
あ、つ、て、平、家、蟹、衣、宿、驛、夢、整、敷、百、群、來、

刺、身、艱、苦、不、可、言、既、驚、覺、時、正、四、  
更、因、自、悔、史、云、云、復、就、寢、終、無、  
事、按、平、整、在、長、州、赤、馬、関、海、濱、不、  
知、謫、亦、有、不、

揺れもそらうくとなる楓

秋風



花と中も様や夢のうきまゝの

とて

夜更みつゝ織ぬ飛保一

その

かりみちのあふれいさうかひ  
婉約是女流之調

百生三界唯一心 瓢々婦 夢見ハ乃々夢見一ツ 亡名氏

也 婦女而作之 真可異 蓋捨園之類

石を燭の吟おなりりり 百里

河中央へ志くくく客は柳か 利牛

投らりて礼と這う角力哉 立吟

白雨の画

夕をそそぎてさめくしかう物 し由

長尻の秋は驚く常う那

妻共列て鶴の羽舞入る色ぞり

滴釜の二條もそ掃く別くふ

時々く屋で逢ひて是れ歌隠体

皆平實有致唯豪逸之趣稍少耳

宋阿

八十八子其のくみやみそり 宋阿

級階や落け来の一きりり



清涼のうへも同じに清くして

瓢の聲

時をゆくは生りて今もあそ

勢ふと同意

長月や父は清くぬ初春の光

老翁の聲

春澄

尼寺の松は樹く藤くゆ

寂光の聲

希因

我田まふ竹の子さき戸と押さ

丸

塗師のふけ今もあそむ初春

此句 續、忘作者、但記江都耳

蚊屋とわく又疎子あや夏の月

はすの

無名氏

濃渾

かきくはわくろとまふ生海風

無名氏

高逸

床てやうハル毛もまふ麻の音

思ひさうふのうわく大はる松屋で

風竹

克己者實可憐

鳴の子は空あふてまふ柳の

無名氏

まふれハむくねはる屋のまふ

沾圃



あゝや柳の枝とやくふく

嵐雪

亭まればおとけりて時を

百里

二章 沈澱精工備極 夢幻而是一門  
戸後世を甚字者唯百中之一習  
之則亦足充擴襟靈

おひつゝも月かり橋ふ

加賀

萬子

けりやけ人きふ秋のそ

芭蕉

俳諧古撰卷之五終

追加

春雨や花隠れぬ是夜也

来山

春の夢をいふはかなき恨み

短夜を二階よりよるより

枕ふき中よりあはれは

けりとも日あふふりぬ

中よりあふふりぬ

近復得 湛翁之數十篇摘之要是  
皆萬國中之物



清いすゝきしる梅の枝

大坂

泉石

飯<sup>酒</sup>の飯とて人々の心

著るるるるるるるるるる

去白ふき四角の蔵の目

三人の枕二ツや 秋の夜

春の夜<sup>時</sup>を食ふ<sup>を</sup>るるるる

雲<sup>を</sup>きて又わい<sup>を</sup>るるるる

萬年先生博物ノ之餘姑干臨池人多知之而俳句亦如此可謂詩笑

夕雲を思ふる牡丹花

尺布

五七五七惜むと尺の目

孤桐

折枝乃<sup>を</sup>思ふるるるる

一鬼

遠く<sup>を</sup>思ふるるるる

雁嘴

結<sup>を</sup>思ふるるるる

大夢

細<sup>を</sup>思ふるるるる

五百卿

蜂<sup>を</sup>思ふるるるる

志帥

鳥<sup>を</sup>思ふるるるる

交翅



永乃志を清く甲斐やふれ月

吳雪

天地れ自際をさそとけり人か

晩平

ゆく春にさうりく（笑や）

青蒲

時鳥今一足れはさるゝれ

芋秀

其人を心乃形や夕涼

鶴女

春雨やあそびをいねぬ夕方

李遊

酒れを幾人前も花見のふ

赤羽

水鳥也かきふくふはきり

之房

雪正時心清く一生海氣か

五鳳

雪解や碓井を越る馬乃瘦

鼓古

行路の細く分るれ山さく

嬉水

山忘れ針や折ふ芭蕉の茂り

富水

大雪や鹿乃出て来る市井町

其流

竹乃葉れ何を鳴くや月夜

鬼流

冬の人泣肺は堅や山極

岸指

上下れ奇添はるる巨匠

吾圓



右君乃昆布弦ひり鳥等

柳志

鶯や障子明なふらぬ

白芽

ほろきり一聲反残定り

江戸

蓼太

物表す時や柳枝枝哉

日け起し島あはれの風

守愚菴

尺多耐ハ吸下るゝふ批杷花

櫓乃上ハ發表す子に採息式

前二章平淡中有妙處此篇精工  
似陶然責子意

俳諧大誰波

初禪天ニ變化ニ祥トニ變化

三祥ト四變化の祥トニ變化

也也志轉更也化也志幻化也

志与系るゝる變化自由高

云乃於電白之志操有必成高

宅氏風流博雅解在例記於



如曰祥变化也。豈有忘乎七  
撰。古今名此乎。幾子第句。孤  
學。龍誌。器。中。一。口。滿。性。接  
上。以。撰。一。子。者。下。和。通。之。所。接  
采。藏。如。先。之。人。為。之。善。性。拙  
冒。諫。然。乎。地。之。者。亦。是。乎。七  
撰。半。屈。至。之。嗜。甚。乎。和。之。嗜

錄性也。古撰亦性。以己為性。妙  
界之人。何者。於此。一。和。是。六  
風。流。之。邪。科。亦。實。習。壬。午。之  
冬。小。門。子。撰。





出時年十三年



審曆十年癸未正月吉日發行

京書林

二等町西

廿

屋敷

板行

新町

西

村

平

八



出時年十三



審曆十年癸未正月吉日發行

京書林

二等町西

甘藷屋

板行

新開

西村平八



